

健康文化

作業活動の治療的利用

柴田 澄江

I. 作業療法と Occupational Therapy

前回「人間尊重の医療—作業療法の生いたちと発展—」と題した小文を掲載させていただいた。「作業療法」は医療の一分野として法律で定められた名称であり、30年近く用いられているにも関わらず、しばしば誤解や批判的になる。“作業”などという語は医学や学問の一分野としてふさわしくない、何を意味しているのかわからない、というのが大方のご意見である。作業療法学科を受験する学生もほとんど実態を知らずに何となく選んでくるらしい。しかしこれが不思議とあまり見当はずれではないようで、中途退学する学生は当学科がもっとも少なく、資格取得後の転向もきわめて少ない。当の作業療法士も良い名称さがしの模索をしばしば試みてきたが、未だに見つからない。

ちなみに英語では Occupational Therapy(OT) という。occupation は通常仕事、職業と訳す。作業療法を職業療法、職能療法と誤解されることが多いが、英語名を見ても同様の誤解を生じそうである。しかし Occupational Therapy の occupation は occupy(占める、占領する) から来ているといわれ、これは患者の幻覚や妄想(先入主という)などを作業活動を行うことによって追い払い、前向きで建設的な、また社会性を持った健全な精神によって occupy することを意味する。occupation は単に職業や仕事を意味するのみでなく、本質的に上記のような意味を持っており、その本来の意味において Occupational Therapy が用いられていると考えられる。

II. 作業療法における作業活動

作業療法と作業活動(activityという)との関係は、

- ①治療の手段として。
- ②人が生きて行くために必要な、また自分らしく豊かに生きる(自己実現)のために必要な作業活動を病気や障害のために行えなくなったときそれ

らができるようにする。目的としての作業活動。

作業療法の理論的な展開は米国が先進的であるが、作業活動をその手段としても、また目的としても、追求することにおいては欧州の作業療法に軍配が上がるようである。個人主義は個人の生活や利益を徹底的に追求し、個人のニーズを満たすことを要求する。例えば重度の麻痺があってもトランプを楽しみたい人にはトランプホルダーを製作するなど、個人がそうしたいと望むことはかなりの障害因子があってもかなえるという基本的な姿勢があるようである。これが生活全般、生きること全般に拡大すれば、重い四肢麻痺者が、独居でも自宅で生活したいと希望すれば、社会の各部分がすべてそのことをサポートするために機能するということになる。寝返りや食事介護などのためのヘルパーの数や補助器具、機種を選択し使い方を指導する専門職などホームケアを支える人と物の資源が十分に用意されている。

また手段としての作業・活動に関しても、筋力増加や関節可動域拡大などの機能訓練のために、用いる道具や方法に奇想天外といえるほどの創意工夫を加える。このように個人のニーズに添うために、作業活動にどこまでも肉薄するというのが欧州の個人主義の伝統というものであろうか。

Ⅲ. 作業・活動の治療的意義

作業活動はなぜ治療手段として有効であるのか、治療的利用の意味について考えて見たい。まず、人が生れて死ぬまでに行なう無数の作業活動を整理分類すると次のようになる。

作業活動 activity の種類

- ①日常生活における個人的作業活動
- ②表現的および創造的作業活動
- ③知的、教育的作業活動
- ④生産的および職業的作業活動
- ⑤レクリエーション

(McDinald の分類)

作業活動を行なうためには、心身のさまざまな機能を必要とする。ある作業療法のテキストではこれを次のように分類している。

- ①運動（筋力、運動協調性、巧緻性、耐久力など）
- ②感覚（視覚、聴覚、触覚など）

- ㉔知覚（運動覚、図一地や空間関係の弁別、両側統合など）
- ㉕認知（注意力、概念化、読解、信号や記号の理解など）
- ㉖感情（自立、依存、象徴性、感情操作、現実検討など）
- ㉗社会性（対人交流、コミュニケーション、協調性など）
- ㉘文化（価値観、生活状況など）
- ㉙その他（年齢適正、安全に対する注意、性的同一化など）

作業活動の治療的意味

1. 失われた機能の回復、再獲得や残存機能の向上のために。

作業活動を行なうことによって失われた機能を回復したり、再獲得することができる。それぞれの作業活動がどのような（上記の）機能を必要とするかを分析し、一人一人の治療に適した作業活動を選択する。これは作業療法士のもっとも重要な仕事であり、選択の適否が治療効果の決め手になる。

2. 無意識の防衛機制や病的状態に働きかけ、問題の種類やありかを、明確にする。それによって自分が立ち向かうべき方向性を見いだす。
3. 心身の機能の発達を促進する。

エンゲルスはその著書の中で次のように述べている。「労働はすべての人間生活の第一の基本条件であり、しかもそれはある意味では、労働が人間そのものを作り出したといわなければならないほど基本的な条件である」。4足から2足歩行への過程における手の働きと労働、協同作業コミュニケーションの発生・発達、社会の形成といった過程において作業活動が猿から人間へという進化を進めてきたことは紛れもない事実であろう。このことは個体として人間にもあてはまる。障害で失われた機能の回復や残存機能の向上のみに留まらず、作業活動によってより成長発達が促される。これは子どもだけではなく、成人にも老人にさえも見られる現象である。また潜在的な能力の発見につながることもある。

4. **Psychodynamics**（心理的力動）の形成から治療へ。

他の患者・治療者関係に見られない特徴は、患者と作業療法士との間に作業活動があり、この3者間の力動が作り出すゆるやかな人間関係がもたらす間接的な治療効果を期待できること。作業活動は目的にかなったものでなければならないが、ある技術を修得するための訓練とは異なり治療的意

味を幾重にも張り巡らし、それ故治療効果も単一ではない。その具体的な例は前回述べた。

5. 満足感、完成の喜び、ストレス解消、不安やイライラ、落ちつきのなさ攻撃性、敵意、(時に痛みも)などの解消といった心理的効果。
6. 神経系の賦活、リラクセーションの促進。
7. 高次脳機能の改善、感覚統合の促進、コミュニケーション能力の促進。
8. 主体性の回復、現実検討能力の回復。
9. 適度な疲労による睡眠と食欲増進。

(名古屋大学医療技術短期大学部助教授・作業療法学科)